

Title	日本華僑・華人のアイデンティティ形成に関する一考察 : アイデンティティ形成と他者との関係に焦点をあてて
Author(s)	石川, 朝子
Citation	大阪大学教育学年報. 11 P.141-P.153
Issue Date	2006-03
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/12547
DOI	10.18910/12547
rights	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

日本華僑・華人のアイデンティティ形成に関する一考察 —アイデンティティ形成と他者との関係に焦点をあてて—

石川朝子

【要旨】

本稿では、日本で生まれ育った神戸市在住の老華僑・華人二世以降のなかでも特に10代後半から20代後半までの老華僑・華人がどのように自己を形成し、自らを位置づけ、そしてこれから生きていこうとしているのかについて、実証的に明らかにした。具体的には「貴方は自分を何国人だと感じていますか」という質問に対する回答を分析し、華僑・華人第三世代の多様なアイデンティティのあり様を、先行研究である過放の5類型に沿うかたちで整理をした。またかれらの経験を分析し、エスニック・アイデンティティを形成する際に、自らを「主観的」「客観的」に位置付けていることが明らかになった。それはつまり、エスニック・アイデンティティを形成するということは「鏡に映った自己を位置づける」過程であると捉えなおした。

1. はじめに

現在世界の華僑・華人^①は、約3000万人を越え、100ヶ国以上に居住している。特に東南アジアに拠点を置くものが多く、そのほとんどが居住国の国籍に帰化した華人となっている。現在、日本には約42万人(帰化者・不法滞在者を除く)の中国人が暮らしている(法務省入国管理局『平成14年版在留外国人統計』)。そのうち、老華僑は約5～6万人である。一方、日本国籍に変更した華人はかなりの数が推測できるものの、統計的には確かな数値は不明である。なかでも老華僑・華人は長い歴史を有しており、現在日本における老華僑・華人の主体は三世・四世へと移り変わりつつある。

国際化の中の日本について考える上で、日本に居住し、共生するマイノリティのアイデンティティのあり様について考察することは、大きな意義をもつものといえよう。本稿の目的は、これら日本華僑・華人第三世代^②の若者(特に神戸在住の老華僑・華人)がどのようにみずからのアイデンティティを捉えているのか、またアイデンティティを形成する際の一要因とは何か、について明らかにすることである。

本稿では、そのために以下の2つの考察をおこなう。第一に、日本で生まれ育った神戸市在住の老華僑・華人二世以降のなかでも特に10代後半から20代後半までの老華僑・華人がどのように自己を形成し、自らを位置づけ、そしてこれから生きていこうとしているのかについての実証的な分析を行う。華僑・華人第三世代の多様なアイデンティティのあり様を、アイデンティティに関する先行研究に沿うかたちで考察する。第二に、エスニック・アイデンティティ形成は「鏡に映った自己を位置づける」ということであるという観点にたち、かれらがその「鏡に映った自己を位置づける」必要性に迫られるとすればそれほどのような時なのかについての整理を試みたい。

2. 華僑・華人のエスニック・アイデンティティに関する先行研究

華僑のアイデンティティに関する先行研究として、まず斯波義信は、19世紀まで中国人や華僑はあまり「アイデンティティ問題」を重要視していなかったと指摘し、「中国とか中華とか華夏とかいう漢語が示すように、かれらは、世界の比類のない中心の文明の人々かその子孫であり、文明と華外との区別とその濃淡の幾重かの同心円のシステムの中核の人々だから、…海外の種族のちがう人々と比べながら自分に思いをいたすことを考えつかないのであつ」(斯波 1995 219頁)だが、1980年代には次第にアイデンティティに関することが話題になっていったという。しかしこの時点でも、過放は、「在日華僑のエスニック・アイデンティティに関する調査・研究はきわめて少なかった」(過放 1999 12頁)としている。

1980年以降多くの研究者は、華僑のアイデンティティを「変容するもの」として位置づけはじめた。たとえば、過放は「在日華僑のアイデンティティには、彼らの生きた時代の相違による世代的特徴が見られる」(過放 1999 170頁)とし、変容趨勢を「在日華僑のアイデンティティの変換モデル」として表1に示している。過放は、三世から五世の若い華僑を「重層的・多様型」とし、かれらの国境を越えるアイデンティティの傾向全体を包括して、「トランスナショナル・アイデンティティ」と名付けている。そしてその内容は、

まず①中国人アイデンティティ、②ダブル・アイデンティティ、③日本人アイデンティティ、④マージナル・マン、⑤トランスナショナル・アイデンティティに分け分析している。

表1 在日華僑のアイデンティティモデル

モデル	年配の華僑 (戦前の世代)	中高年の華僑 (日中国交正常化 以前の世代)	若い華僑 (日中国交正常化 以後の世代)
年齢	70歳以上	45～60歳前後	20～45歳前後
世代	1～2世	2～3世	3～5世
社会生活に 入った時期	戦前～1945	1945～1972	1972～現在
日中関係	戦前・日中戦争	零戦時代・国交非正常化	国交正常化
1. モデルの種類	強い出自志向型	双方向ジレンマ型	重層的・多様型
2. アイデンティ ティのパターン	エスニック・アイデンティティ (ethnic identity) ①中国人アイデンティティ	ナショナル・アイデンティティ (national identity) ①中国人アイデンティティ ②ダブル・アイデンティティ (中日型・日中型) ③日本人アイデンティティ ④マージナル・マン(どちらにもつ かない)	トランスナショナル・アイデンティティ (transnational identity) ①中国人アイデンティティ ②ダブル・アイデンティティ (中日型・日中型) ③日本人アイデンティティ ④マージナル・マン(どちらにもつ かない) ⑤トランスナショナル・アイデンティ ティ(アジア人・国際人・地球人)
3. 社会生活 の文化的背景	郷土・祖国伝統文化、 同郷人の連帯感	中日の政治・法律・ 社会・文化	多元文化
5. 居住志向	帰郷→定住	定住	定住
6. 生活パターン	中国地域文化型	中国地域・日本文化 混在型	日本文化型
7. 婚姻パターン	同郷人同士	中国人同士	国際結婚(日本人と)
8. 子女の国籍	中国	中国・日本	日本が主

過放『在日華僑のアイデンティティの変容—華僑の多元的共生—』1999 p.171

その表で過放は、若い華僑のアイデンティティの多様化を指摘し、「在日華僑のアイデンティティの変換モデル」において、華僑・華人のアイデンティティの変化を時代、年齢及び世代によって三類型した。まず「強い出自志向型」である「年配の華僑(戦前の華僑)」のアイデンティティ・パターンを「エスニック・アイデンティティ」と名付け、「中国人アイデンティティ」を持っているとする。次に「中高年の華僑(日中国交正常化以前の世代)」は、「双方向ジレンマ型」であり、そのアイデンティティ・パターンを「ナショナル・アイデンティティ」と名付け、「年配の華僑」では持ち合わせていない「日本人アイデンティティ」を持つ華僑が現れてきたことを示している。最後に「若い華僑(日中国交正常化以降の世代)」のアイデンティティのあり様を「重層的・多様型」である「トランスナショナル・アイデンティティ(国境を越えるアイデンティティ)」と名付けている。それは、『中国人としての誇りをもって』生きていこうとしている若者もいれば、中国か日本かどちらかの国籍をもちながらマージナル・マン、アジア人、国際人、地球人として生きていこうとしている者もいる」というもので、日本の老華僑の抱くアイデンティティの歴史の変遷と日本老華僑の若者のアイデンティティの現在を捉えているように思われる。

一方で陳天璽は華商(商業を営んでいる華僑・華人のこと)を対象として、華僑ネットワークとアイデンティティの歴史の変遷を三期に分けて類型化している。それによると、第一期(20世紀初頭～半ば)において華商は移住国における他民族との差異を感じており、その相互扶助意識は高かったとし、かれらのアイデンティティは「中国的・生得的」であったとする。第二期(20世紀半ば～1970年代)では、徐々に移住国における他民族との差異は減少し、それに伴い華商の相互扶助意識も低くなる。すなわちその年代の華商たちはアイデンティティにおいても「中国離れ」がすすみ、「移住国への同化」が始まる。その

ようなアイデンティティの歴史の変遷を受けて、第三期（1980年代～現在）では『…移民としての経験や国際環境の変換に影響され、彼らの identity は多元化された』（陳天璽 2001 117頁）と現在の華僑・華人・（華商）のアイデンティティを「多元的・用具化」であると指摘している。

これら、過放の「在日華僑のアイデンティティ変換モデル」と陳天璽の「華僑のネットワークとアイデンティティの歴史の変遷」のどちらの類型も、現代華僑・華人のアイデンティティが多様化していることを指摘しており、中国人としてのアイデンティティに限らず、日本人としてのアイデンティティをも併せ持つ存在であることを示している点で注目される。

現代華僑（三世から五世）のエスニック・アイデンティティに関する研究は、近年盛んに行われつつある。それらのなかには、自らが華僑である研究者が、「自分とは何者か」という「自分探し」をしている資料が数多い。また、日本華僑に関わらず、海外の華僑二世・三世のアイデンティティの葛藤を描いている文献も多く見られる（Wing Chung Ng 1999）。それらの多くの研究者は、現代華僑は時代とともに、中国との繋がり希薄化によりアイデンティティは居住国に同化融合しつつある、という見方をしている。『素顔の華僑—逆境に耐える力』の「第三世代」という文章は、華僑三世の同化問題を扱ったものである。それによると、三世の「彼らは日本語でものを考え、日本の物の豊かさも同時に享受している」（神戸新聞社 1987 p.111）ので、三世の幼稚園児たちからは「中国人らしさ」を見つけるのは難しいとしている。また、「成人前に悩む自分とは何か」と問いつづけることによって、自己のアイデンティティの位置づけに困惑している華僑三世の姿が浮かび上がる。

以上の先行研究は、華僑・華人のアイデンティティを変容するものとして位置付け、世代別または歴史的変遷によるアイデンティティの変容を示しているといえよう。筆者もこのようなアイデンティティの変容が華僑・華人にみられると考える。そこで、本稿では過放の類型を参照し分析及び考察を行いたい。なぜなら、過放の類型化は本稿の調査対象である華僑・華人第三世代のアイデンティティを具体的に類型化して整理しているからである。

3. 華僑・華人第三世代のアイデンティティのあり様

筆者は2004年にインタビュー調査とアンケート調査を行ったが、本稿では主にそのインタビュー調査を、分析の対象とする。その際、アンケート調査は補足的に用いることにする。

インタビュー調査は、2004年6月から11月まで3回にわたり、老華僑・華人第三世代の若者4人を対象に行った。今回のインタビュー調査の目的は、個人がどのように自己のエスニック・アイデンティティと向き合っていたのかを捉え、その形成の要因を抽出することにある。そのために、インタビューには、それぞれの小学校から高校における経験をライフヒストリー形式で自由に語ってもらった。インタビューの選定にあたっては、神戸華僑歴史博物館の館員の方々に協力を仰ぎ、大阪中華学校卒業生を1人、神戸中華同文学校卒業生3人を紹介してもらった。大阪中華学校卒業生であるAさん（女性 33歳 三世）には2004年6月28日に2時間程度のインタビューを行った。神戸中華同文学校卒業生のBさん（男性 19歳 三世）、Cさん（男性 19歳 三世）、Dさん（男性 18歳 三世）には2004年7月3日と8月28日、両日ともに2時間程度ずつインタビューを行った。その他に、手紙でのやりとりも行った。また、今回のインタビューは日本語で行った。インタビュー어의プロフィールは表2のとおりである。

表2 インタビュー어의プロフィール

インタビュー어	年齢	性別	職業	国籍	世代	卒業校	親の職業
Aさん	33歳	女性	公務員 (中学教師)	台湾籍	大阪華僑三世	大阪中華学校	自営業
Bさん	19歳	男性	大学生	中国籍	神戸華僑三世	神戸中華同文学校	サラリーマン
Cさん	19歳	男性	大学生	中国籍	神戸華僑三世	神戸中華同文学校	会社員 (中華食材店)
Dさん	18歳	男性	大学生	中国籍	神戸華僑三世	神戸中華同文学校	会社員 (中華食材店)

一方アンケート調査は、日本で生まれ育った老華僑・華人第三世代の、特に10代後半から20代後半まで、中華同文学校第48届から第54届までの卒業生系662名を対象とした。アンケートは、7月15日と8月16日に100部ずつ計200部を郵送で配布した。回収状況は手渡し分24部を含めた224部中、40部を回収することができた。アンケート調査では、回収率が約20%と一般性が求められる量を確保することができなかった。上記の通り非常にサンプル数が少なく、限られた情報にすぎない。したがって、本稿は探索的な性質をもつものである。

若いアイデンティティのパターンとして、以下ではインタビュー調査の結果をもとに第三世代のアイデンティティのあり様を、過放のアイデンティティモデルと照らし合わせながら見ていくことにする。

アンケートでは、Q3「貴方は自分を何国人だと感じていますか」という質問に「1 中国人、2 日本人、3 中国人でもあり、日本人でもある、4 ときどき自分は何国人だか分からなくなることがある、5 その他」の中から選択し回答してもらった。その結果、一番多く占めていたのが過放の5種類のなかの「②ダブル・アイデンティティ」を示している「3 中国人でもあり、日本人でもある」(40人中18人)であった。二番目に多いのは「1 中国人」であり、これは過放のいう「①中国人・アイデンティティ」に当てはまる。三番目は過放の類型では「③日本人アイデンティティ」を指す「2 日本人」という結果であった。今回のアンケート調査では「4 ときどき自分は何国人だか分からなくなることがある」を選択した者は一人もいなかった。また「5 その他」の自由記述には、「どちらとも感じない。(男性 21歳 中国籍三世)」や「何人でもない。国籍にこだわらない。(女性 29歳 中国籍三世)」、「国籍が中国である日本に住んでいる人=中国人でも日本人でもない(男性 29歳 中国籍三世)」など、過放のいう「④マージナル・マン(どちらにもつかない)」や「⑤トランスナショナル・アイデンティティ(アジア人・国際人・地球人など)」を表す記述もみられた。ただし、かれらのようにエスニック・アイデンティティを位置付けているものは今回のアンケート調査では非常に少なかった。

では、具体的に今回のインタビュー対象者4人のエスニック・アイデンティティのあり様はどのようなだろうか。インタビューでのかれらの語りから、自身のエスニック・アイデンティティをどのように捉えているのか見ていくことにする。インタビューのスキプトの記号については、筆者をIとし、Aさん、Bさん、Cさん、Dさんの発話はそのアルファベットのみを記した。

3-1. 「中国人である」=「中国人アイデンティティ」

インタビューにおいては4人中、AさんとCさんの二人が自分のエスニック・アイデンティティを「中国人である」と位置づけている。まず、大阪華僑三世であるAさん(女性 33歳 台湾籍三世)はインタビューで、自分のアイデンティティに関してこう語っている。

A:「ただ、なんかその、自分は、中国人として、別に中国人こだわってるわけではないんだけど、お友達とそういう話しになったときに、中国人やでえーって普通に言ってたし、中国語も話せるう?ってきかれたら、話せるって話しをして、友達に聞かれたら、ちょっと簡単なん教えたりもしたり。」

Aさんは筆者が行ったアンケートのアイデンティティに関する質問に対して「中国人」という項目を選択していることから、Aさんは自分自身のアイデンティティを「中国人」と位置付けていることがわかる。次にCさん(男性 19歳 中国籍三世)の場合をみることにする。神戸中華同文学校で学んでいたことに対して、

C:「でもやっぱり、中国人だから、ここに入ってるんだっていう。」

I:「入るときに…」

C:「もうなんか。入る時にお前は中国人やからここに入るんやっていう感じのものもあるし。あとやっぱり、授業とかも、小学校はどの、全部の授業が中国語でやり始めるんですよ。でやっぱり、ずっとそれを聞かされるとお、やっぱり、あー自分は中国人なんやあって感じもあるし。やっぱり歴史とかも学ぶんで

すよお。そういう始まりから、今までとか。あーやっぱり、日本人とは違ったことをやってるんやなーとか。で、やっぱり、中学校になると、やっぱり次日本人の学校じゃないですか。てことは、日本の学校に慣れるために、下準備がいるんですよ。今までやってきた…。授業が中国語の授業以外で日本語の、日本語を話して授業しはじめるんですよ。教科書も日本の学校が使ってるやつを使ったりとか」

I：「はじめるんですね。入試とかでね。」

C：「そう言う面で、やっぱり僕は中国人やなって。」

I：「いまでもそう思ってますか？」

C：「やっぱり、小学校でそういう教育受けたんで。やっぱり、日本の大学とか行っても、僕は中国人だなって。」

このように彼は小さい時から自分が「中国人」であると意識していたという。その意識は高校・大学に進んでからも、現在に至るまで続いているという。

3-2. 「中国人でもあり、日本人でもある」＝「ダブル・アイデンティティ」

インタビューでは、上記の二名を除くBさんとDさんが自分のエスニック・アイデンティティを「中国人でもあり、日本人でもある」と位置づけた。神戸華僑三世のBさん（男性 19歳 中国籍 三世）は、自分のアイデンティティをインタビューをはじめた頃は、

B：「神戸人。」

である、と国籍ではなく生活している地域にそのアイデンティティを位置付けていたが、その後のインタビューでは

B：「まあ。だから名前とか言わんかって普通に接してたら、こう相手も日本人やろなと思うし、だからそういう部分では、日本人中国人両方のいいところをとった。みたいな得したような感じ。」

と答えており、自分を「中国人でもあり、日本人でもある」と位置付けている。

Dさん（18歳 三世 中国籍 三世）は、Cさんの弟である。四人兄弟の上から3番目である。Bさん、Cさん、Dさんと筆者が同じ机を囲んでインタビューを行ったわけだが、Cさんの「高校とか行ったら周りがみんな日本人になるわけで、やっぱそこに入っていったら、自分もあんまかわらんやんって。一応形上では、そういう風に中国人になってるけど」という発言に対して、

D：「パスポートが変わるくらいやな」

また、

D：「そうですね、やっぱり、さっきもゆってたんですけどお、あんま普通に暮らしても、日本人と中国人の境みたいなのがばってないんでえ、普通に暮らしても、自分中国人なんやていう意識、あんまり意識はしてないですね。」

と答えており「中国人」としての意識を強くもっている方ではないことがうかがえる。

3-3. 「日本人である」＝「日本人アイデンティティ」

今回のインタビュー調査で、「日本人である」と位置付けた者は一人もいなかった。しかし、アンケー

ト調査では40人中7人が「日本人である」と回答している。そしてかれらが「日本人である」と位置づけた理由やそれに至る経験を数名が自由記述に書いている。たとえば、「私の父はハーフで母は日本人です。しかし、父は日本で生まれ日本で育ち、日本の学校に通ったため、全く中国語が話せません。なので、私は同文学校で中国語を学び、話せるようになりましたが、華僑という意識があまりありません」(女性 20歳 日本籍三世)。また、「昨年中国で仕事をするようになった。それまでは、中国人としての自覚や自尊心を持っていましたが中国で仕事をしてなくなりました。本場の中国人は最低であり、私たち華僑は日本人である。新華僑や華人は中国人でしょう。しかし、日本国の生活が長くなってくると日本人もどきになりうる。国籍が中国なので日本に変更したいと初めて非常に希望する。中国人と一緒にされたくないし、又絶望した。中国人も私の事を日本人と考えている」(女性 28歳 中国籍 四世)。など、中国における中国人と接した経験から中国人を差別する意識が自らを「日本人である」と位置づけさせるケースもみられた。

3-4. 「どちらでもない、無国人である」 = 「マージナル・マン、トランスナショナル・アイデンティティ」

インタビューでは、「マージナル・マン」や「トランスナショナル・アイデンティティ」として自己を位置付けたものは一人もいなかったが、アンケート調査では「5 その他」と回答したもの(40人中5人)のなかで、「どちらでもない」や「無国人」と記入したものが4人みられた。そのうちの何人かは、その理由やそれに至る経験などを以下自由記述欄に書いている。「自分が華僑だという意識はあまりないし、かと言って日本人だと思ふことはまずない。大きくなるにつれて、中国人であることを受け入れるようになった。しかし、中国人と日本人の間にいる気がする。(いや、やっぱちよつとちがうかも…)自分は無国人だと思ふ事がある」(男性 21歳 中国籍 三世)や、「日本vs中国のスポーツの試合でどちらを応援するかと良く聞かれたがどちらでもない。日本・中国どちらに属す必要もあまり感じなかった。国籍は書類上の問題と思った」(女性 29歳 中国籍 三世)などである。

インタビューをとおしてみられるこれらの結果は、冒頭で述べた過放の種類である「トランスナショナル・アイデンティティ」の内容に沿う結果であるといえよう(過放 2001 172 頁)。

本節では、神戸に住む華僑・華人第三世代のアイデンティティのあり様を過放の種類に沿って整理した。次節では、かれらが自らのエスニック・アイデンティティを形成する一要因として、他者との関係に焦点をあて、かれらが自らの位置づけを迫られたのはどのような時なのかについての整理を試みる。インタビューやアンケートの自由記述に見られた、①「客観的差異による自己の位置づけ」と、かれらが高校に進学して経験する②「確かめの時期」に着目し、「他者からの視線をうけアイデンティティを形成する」場面を浮き彫りにしたい。

4. アイデンティティと鏡—「鏡に映った自己を位置付ける」時—

(エスニック・)アイデンティティを位置づけるというのは、いったいどういうことなのであろうか。社会心理学者の C.H.Cooley は、有名な著書 *Human Natural and Social Order* (1902) において、「鏡に映った自我 (looking-galss self) 理論を展開している。それは、「自我は、他者との直接的接触の過程において自己の行動にたいする他人の反応と、それによってひきおこされる自己意識との相互作用の過程から形成される」(大橋 幸、1970、333 頁) ものとみた、自我形成理論である。「そしてこのばあい、三つの意識の発生がこの過程を左右する」としている。それは「第一に、他人に自分がどうみえるかを想像する意識、第二に、他人が自分をどう判断しているかを想像する意識、第三に、これらの意識と関連する誇り、もしくは恥の感情」(C.H.Cooley, 1902, 184 頁) である。この三つの意識の発生をとおして、自己を位置づけていくわけだが、そのことによって「いわば、それはもっとも明瞭度の高い鏡としての機能を備えた集団としての条件を、満たすもの」(大橋 幸、1970、333 頁) となる。このようにして形成されるアイデンティティは、「単なる個人意識ではなく、同時に他人の存在、動向を意識することにおいて成立する社会意識としての個人意識」(大橋 幸、1970、333 頁) であるといえることができる。

また、同じく社会心理学者である A.L. ストラウスも著書『鏡と仮面』(A.L. ストラウス 1969)の中で、アイデンティティ形成について以下のように述べている。「アイデンティティは自分や他者による—自分自身に対して避けられない評価に関連」(A.L. ストラウス 1969 p.9 片桐訳書 2001 p.13)しており、「他者の判断という鏡の中で自己を見つめ」(A.L. ストラウス 1969 p.9 片桐訳書 2001 p.13)ているのだと言う。また、自己評価においても、「他者の反応が考慮されなくてはならない」し、自分の未来の行いを予測するときにおいても「ある種の複雑な鏡のなかで見ている」(A.L. ストラウス 1969 p.34 片桐訳書 p45)のであると述べる。このような他者との相互作用をとおして、自己を形成するまたは位置づけるのは、具体的にはどのような時であろうか。

では以下具体的に、インタビュー及びアンケート調査から浮かび上がった、①「客観的差異による自己の位置づけ」、②「確かめの時期」に焦点をあて、日本の華僑・華人第三世代「他者から視線をうけアイデンティティを形成する」場面を浮き彫りにしたい。

4-1. 客観的差異による自己の位置づけ

かれらのエスニック・アイデンティティを位置づける要因として、中国語が話せるや宗教・行事や姓名などの、日本人との客観的な差異によって自らを「中国人」として位置付けていることが、インタビューのなかで多くみられた。

たとえば、「中国人である」と自らを位置付けた C さん (男性 19 歳 中国籍 三世) は、客観的差異である姓名や中国語について以下のように語っている。

C: 「でも名前みたらわかるじゃないですかあ。日本人の方って二文字が多いじゃないですか。山田とか」

I: 「名字が？」

C: 「〇〇さん(山田・田中)とか。僕たち一文字じゃないですか。一文字なんでばっとみたらこの人は多分、ちがうかなって。」

C: 「中国人やったらなんか中国語しゃべれる。っていうなんか…」

I: 「しゃべれてあたりまえだって思ってしまうはるんですか？」

C: 「思ってしまうはるんですよ。中国人やから中国語しゃべって一みたいなの。」

I: 「言われます？」

B: 「結構言われます。」

C: 「やっぱり日本の高校に行っても、やっぱり国語の時間あるじゃないですか。もし漢文習うじゃないですか、そしたら、この漢文を中国語で読んでみてくださいみたいなことを…」

I: 「言われるんですか。」

C: 「たぶん学校によって、先生によっても違うとは思んですけど。やっぱりそういうのもありますよ」

I: 「どんな風に思います？そのときそんな言われて」

C: 「やっぱり、読める漢字もあれば、読めない漢字もあるんですよ。そんなときは…アドリブで」

B: 「ある。」

I: 「ある。」

B: 「あっ僕読めないですっみたいなの。」

C: 「みんな聞いても (C&B) 分からん。何を言っても分からないんですよ、みんな。」

B: 「だから先生もたぶん分かんない。みんな聞き終わってから、おー」

高校時代に「中国人だから中国語が話せる」というレッテルを貼られた経験をしたのは、自らを「中国人」とであると位置付けている C さんだけではなかった。「中国人でもあり、日本人でもある」というエスニック・アイデンティティを有している B さん (男性 19 歳 中国籍 三世) までもが、B さんと C さんが進学したのは別々の高校であるにもかかわらず、客観的な中国語が話せるという差異によってアイデンティティ

を強要された経験を持っている。アンケート調査の自由記述にも、このように言語などの客観的な差異によって「中国人である」と自己を位置付けた華僑・華人のアンケートには以下のような記述が目立つ。

よく中国語をどれ程しゃべれるのかをたずねられて、普通に喋ってみると、「すごい」と羨まれたこと。それに違和感を感じたこと。(女性 27歳 台湾国籍 二世)

高校生のとき、初対面の人に名乗った時に名前、特に「姓」を聞かれた時に自分が中国人であることを強く意識した。小・中学時代には無かった経験。社会人になってからも同じ。(男性 29歳 本籍台湾 中国籍 三世)

これらの経験は、日本人との相互行為の中で生まれてくるものである。かれらは常に日本社会のなかで、エスニック・アイデンティティを他者から押し付けられている。このことはつまり、マイノリティは常にマジョリティとの間で自分自身の位置づけを強要され、言語や宗教などの客観的な差異のために他者から押し付けられることによって、そのアイデンティティを、かれらの主観的なエスニック・アイデンティティの内に含有している場合だといえよう。しかしこのことは、華僑子弟教育を行っている中華学校などを卒業した場合や、家庭教育として依然と華僑・華人の行事などを行っている場合などの中国語や宗教、中国姓など客観的な差異が看取される第三世代には当てはまるが、日本の学校を卒業し、家庭でも全く華僑・華人文化が継承されていない場合には、妥当しないかもしれない。

4-2. 「確かめの時期」

関西にある二つの華僑学校（大阪華僑学校と神戸中華同文学校）には高等部がなく、卒業後進学する場合には、ほとんどの華僑学校生徒が日本の高等学校に進むことになる。大阪中華学校中学部を卒業したAさんもその後、日本の高校へと進学することになる。はじめて華僑学校という枠を離れて日本の学校に入学して、エスニック・アイデンティティを意識する経験を多くしたという。彼女はその高校時代を「確かめの時期」とよんだ。

I: あーなるほど。それは、えーと、大きくなられてからそう言う風に感じとられていったのかー・・・
Y: そうですね。子供の時は、全然そういうことは意識していなかったけども、大人になるにつれて、あそこは友達とちがうなって思ってた中で、じゃこの違いは何？って、あそここれは自分のルーツの中国からきているんだなってっていう、そういう確かめの時期がすごく一時期がありました。

I: 確かめの時期。その、ほかの友達とちがうな一と思った時っていうのは、例えばどんな・・・具体的に。
A: (……) なんかお総菜屋さんをやっているお友達がいて、高校ん時に、「毎日お味噌汁飲む」って言った時に、びっくりして、「毎日い？」って、「そんなん普通やん」って言われたときに、じゃ、私は普通じゃないのかなってか。

I: 高校の時、先程も少しお話しがありました。例えば、小学校と中学校と、また何か違うなあと学校生活の中で感じたこと、ってありますか？

A: なんかねえ、在日のねえ、女の子がいて、その子は日本名だったんだけどお、で、(……) その子が、「自分は、あのお、韓国人なんだけどお、Aちゃんは中国語しゃべれるでしょ？中国人でって。私は韓国人だけど、韓国語しゃべれない。それってすごく恥ずかしいことやと思う？」って聞かれたことがあって、私は「そんなことないんちゃう」って答えたと思うんだけど。なんか、すごい、その子にとっては、私にそういうことを聞きやすかったのかなあ。何であの子が私に聞いたんやろって、今になったら分かるう。うん、そのときは分からなかったけど。

Aさんにとって高校時代は、食事や友達からの一言、また在日韓国・朝鮮人の友達からの「中国人だから、中国語をはなせる」というまなざしを受けて、自分のエスニック・アイデンティティを「確かめ」

ていた時期だと語った。

BさんやCさんは高校の入学に際し「絶対こいつらとは友達になれんわって思った」や「やっぱり日本の高校入ったら、ちょっとちゃうよな」と感じたという。その後の筆者との手紙のやりとりでCさんは、その理由を以下のように書いた。

幼・小・中と友達の多くは中国国籍の人達だったし、友達も中国語を話せたので日本の高校にいくと周りはみな日本人で誰も中国語を話せないから。またみんなが中国語ではなせると知ると、みんな珍しがるから。

このように華僑学校という枠を離れて日本の高校に進学した時に、日本人との関係に戸惑いや違和感をもった経験を書いたアンケートがみられた。たとえば、

周囲の人はほとんどが日本人でいろいろな面で、戸惑いを感じる事があった。中国人である事を意識する様になる時期です。(男性 24歳 日本籍 四世)

お弁当を温めずに食べるということになったとき、(同文学校ではお弁当を温めることができました。また冷たい料理を食べることがあまりなかった。)食に対する考え方が日本人と少し違うと感じた。

お弁当に鳩(ハト)だけを入れて持って行くと友達が非常に驚いてウケていたことに私が驚いた。(日本では食べ物の種類が少ないと改めて思った。)(女性 21歳 日本国籍 二世)

などである。

以上の記述や語りから、華僑学校を卒業した後日本の高校に進学し、日本の学校と中華学校を比べたり、日本人との関係のなかで、エスニック・アイデンティティを意識する一因となる多様な経験をしている場合が多くあることが明らかとなった。それは他者(日本人)からの厳しい視線を受け、否応なくエスニック・アイデンティティと向き合うことになったかれらの青春の姿であった。その厳しい経験がかれらに違和感や戸惑いをもたらす結果となっていたことも注目される。このことはつまり、エスニック・アイデンティティを形成するとは「鏡に映った自己を位置づける」過程であるということである。かれらは自らの経験を振り返り、インタビューやアンケート自由記述などで、「日本人から私はこのように思われているようだ」や「日本人はこうだが、私は違うのだ」といった位置づけを絶えず繰り返す姿を示している。

5. おわりに—今後の課題

まず本稿では、神戸に住む日本華僑・華人第三世代のエスニック・アイデンティティのあり様について、過放の種類を用いて整理をした。そこから明らかになったことは、これらの結果が、過放の種類である「トランスナショナル・アイデンティティ」の内容に沿う結果である、ということである。具体的に言えば、過放の「在日華僑のアイデンティティ変換モデル」にいおける、三世から五世の若い華僑を「重層的・多様型」とし、かれらの国境を越えるアイデンティティの傾向全体を包括して、「トランスナショナル・アイデンティティ」と名付けているものと、ほぼ合致している。そしてその内容は、まず①中国人アイデンティティ、②ダブル・アイデンティティ、③日本人アイデンティティ、④マージナル・マン、⑤トランスナショナル・アイデンティティである。

本稿のエスニック・アイデンティティ研究としての視点は、個人的なアイデンティティがどのように形成されてきたのかの考察である。そのため、重要なのは個々人が日々の生活の中で、どのようにエスニック・アイデンティティを形成してきたのか、その個人レベルでのアイデンティティ形成の一要因を捉えることである。

また、他者からの客観的な位置づけによって形成されたアイデンティティに着目するためには以下のアプローチが必要であろう。それは「客観的基準と主観的基準を結合させ、エスニックの基準にもとづいた

アイデンティティの柔軟性を強調した」(Anya 訳書 1996 199 頁) 定義に基づく「複合的アプローチ」である。そこから浮かび上がってくるものは、マイノリティは常にマジョリティとの間で自分自身の位置づけを強要され、言語や宗教などの客観的な差異のために他者から押し付けられたアイデンティティを、かれらの主観的なエスニック・アイデンティティの内に含有している場合、つまり他者からの客観的な位置づけによって形成されたアイデンティティを主観的なアイデンティティとして位置付ける場合である。換言すれば、華僑・華人第三世代のエスニック・アイデンティティ形成過程においてかれらが捉えるエスニック・アイデンティティの客観的側面とそれを含む主観的側面を分析するアプローチである。「主観的アプローチ」⁽⁹⁾のみをとるならば、かれらの発するエスニック・アイデンティティをそのまま安易に採用し、マイノリティは常にマジョリティとの間で自分自身の位置づけを強要され、言語や宗教などの客観的な差異のために他者から押し付けられたアイデンティティを、かれらの主観的なエスニック・アイデンティティの内に含有している場合があるということを見逃してしまう恐れがあるからである。「複合的アプローチ」では、その他者からの客観的な位置づけによって形成されたアイデンティティをも着目することができる。また、第三世代である華僑・華人は中国語や宗教など客観的な差異が看取されることがあるので、客観的視点も欠かすことができない重要な視点であると思われる。また、それらの客観的差異が見られることから、自分自身が中国人であるという自覚をかれらも持っているということも忘れてはならない重要な点である。

本稿ではその「複合的アプローチ」を採用し、華僑・華人第三世代のエスニック・アイデンティティを形成する際の一要因をかれらが捉えるエスニック・アイデンティティの客観的側面とそれを含む主観的側面に焦点を置いて考察してきた。これはデ・ヴォス (De Vos 訳書 1996 213 頁) の言う、エスニック・アイデンティティの説明に関係していると考えられる。それは、

エスニック・アイデンティティとは、ほかの類のアイデンティティと同じく、たんに主観的に自分が誰であるかを知っているというだけでなく、自分が外部からどのようにみられているかということについての問題でもある。(1975: 374)

というものである。かれらは自己のエスニック・アイデンティティに関して、日本人との違いを意識させられながら生活しているのではないか。

このことはつまり、エスニック・アイデンティティを形成するとは「鏡に映った自己を位置づける」過程であるということである。かれらは自らの経験を振り返り、インタビューやアンケート自由記述などで、「日本人から私はこのように思われているようだ」や「日本人はこうだが、私は違うのだ」といった位置づけを絶えず繰り返す姿を示している。かれらの経験からみえてくる「鏡に映った自己を位置づける」という行為は、A.L. ストラウスの『鏡と仮面』で言われる「鏡のなかで自己を見つめる」ことや、クーリーの言う "Each to each a looking-glass Reflects the other that doth pass" - 「それぞれ互いに、鏡は通り過ぎし他者を映し出す」(片桐訳 2001 p 45) とほぼ同じことを示している。つまり、4 節. 1 「客観的差異による自己の位置づけ」で明らかにした、中国語を話すことができるや、宗教・行事や姓名などの日本人との客観的な差によって自らを「中国人」として位置づけていることは、クーリーの言う第二の意識である「他人が自分をどう判断しているかを想像する意識」を表している。そして、同節. 2 「確かめの時期」でふれた、はじめて華僑学校を離れて日本の高校へ進学する際に自己と向き合う姿は、クーリーの言う第一の意識である「他人に自分がどうみえるかを想像する意識」を表している。そしてこれらの意識の根底にあり支えていると思われるのは、華僑・華人であるといったかれらの誇り(クーリーの言う第三の意識)なのではないだろうか。このことから、日本社会に生きる華僑・華人は相互作用をとおして、自らを鏡に映し位置づけていることがいえよう。

しかし上述した「客観的」「主観的」という見方は、第三世代に限ったことではない。というのも、かれらの親世代である第二世代は、一世である親から中国人としての教育を受け、客観的差異を第三世代より強く感じただろうと推測されるからだ。朱氏は華僑・華人の世代相違について「一般的に、華僑一世は母国の文化を頑固に守り、居住国の影響を断っているのに対して、二世は一世より居住国の文化に近く、両方の文化の間に掛橋の役割を果たしている一種の『中間人』といえる。三世、四世になると、…居住国に対する関心度、接近度が高くなる傾向がある」と述べている(朱慧玲 1999 51 頁)。しかし、第三世代のかれらが自らを「中国人であり、日本人である」と位置付けるのは、朱氏が言うような世代の相違だけが要因ではない。なぜならこのような位置づ

けには、マジョリティがかれらに「中国人である」ことを強制しているという社会・文化的要因が考えられるからである。日常生活という面において限りなく日本の生活に密着している第三世代のかれらが、マジョリティからの客観的位置づけを受けているということに特に着目する必要があるだろう。「鏡に映った自己を位置づける」ということも第三世代だけに限ったことではない。そしてまた、華僑・華人社会内での相互作用や互いに位置づけあうといった場面を捉えられてはいない。また日本名で華僑学校ではない学校に通う華僑・華人のあり様についても迫ることができていない。これらのことは、今後の課題として明らかにしていく必要があると感じている。

<注>

- (1) 「華僑」とは、中国国籍を保有し、「海外に仮住まいする中国人」のことをさす。日本華僑のほとんどは、東京・長崎・神戸・大阪・横浜・函館のような旧開港場に集住しており、伝統的な商業社会を形成している。英語では Overseas Chinese 又は Chinese overseas が一般的に使用される。一方、「華人」とは海外居住国の国籍を取得している人達で、英語では Ethnic Chinese と呼ばれる。次に「老華僑」は、「新華僑」(1972年の日中国交正常化以後、または1979年からの中国大陆での改革・開放後に、中国を離れて日本に入学し、日本で生活する中国人)に対して、初期中国移民およびその子孫に対する呼称である。また「在日中国人」という言葉は、日本に滞在する中国人に対する包括的な呼び方としてももっとも広く使われている。平成15年末現在における外国人登録者統計において、在日中国人は約46万人にもものぼるとされている。そのうち、老華僑(旧華僑)がおよそ4万人、約一割で、あとの9割を新華僑が占めている。(可児 2002)
- (2) 本稿では、三世・四世・五世なかでも10代後半から20代後半までの若い華僑を分析対象とする。かれらを第三世代と呼ぶこととする。これは過放の分析モデルを援用したものである(過放 1999 170頁)。過放は、日本華僑・華人の世代を以下のように区分している。「中国から日本に移住した中国人を一世代として計算する区分の仕方である。彼らを『一世』と呼び、日本で生まれた一世の子どもを『二世』と呼ぶ。以後、このように加算する」。しかし、たとえ同じ「二世」に属していても、生まれ育った時期や社会環境などが異なれば、かれらの考え方などにも違いが出てくると考えられることから、世代間のへだたりを補うために年齢区分を用いている。その年齢区分を、70歳以上の年配の華僑を「戦前の華僑」、45歳から60歳前後の華僑「日中国交正常化以前の世代」、最後に20歳代から45歳前後までの華僑を「日中国交正常化以降の世代」と三類型している(過放 1999 9頁)。かれらはその「日中国交正常化以降の世代」に分類されるであろう。
- (3) アニヤ・P.ロイス(Anya 訳書 1996)は、エスニック・アイデンティティのアプローチを、以下の三つに分類している。まず一つめは「客観的アプローチ」であり、二つめは「主観的アプローチ」である。三つ目は「複合的アプローチ」であり、これは上記の一つめと二つめのアプローチ双方の要素で構成されている。
言語や宗教などに着目し分析する「客観的アプローチ」に対して、さまざまな研究者が「主観的アプローチ」の有用性を議論している。例えば、さまざまなエスニシティの定義を社会学・人類学の研究論文65編を検討し、社会学者が実証的な研究のなかで使用するエスニシティの定義について分析したゼボルド W. イザジフは「主観的アプローチは客観的アプローチより有効であるといえる。それはこの定義が、心理的アイデンティティに焦点をあてることにより、観察可能な文化の共有、あるいは他の属性を強調する定義に比して、二世あるいは三世のエスニック世代を包含することを容易にするからである」(Wsevoid 訳書 1996 81頁)という。またイザジフは人類学者フレドリック・バルト(Fredrik Barth 1969)の「エスニック集団の境界は成員資格の問題であって、社会的に関連性のある要因のみが成員資格の判定に役立つのであり、他の要因によって作り出された顕在的な“客観的な”差異ではない」(Wsevoid 訳書 1996 80頁)、または「考慮される特性は“客観的”差異の総体ではなくて、その行為者自身が意味があると考えているもの」(Wsevoid 訳書 1996 81頁)という文章を引用し、「主観的アプローチ」の有用性を説いている。主観的アプローチは、顕在的で客観的なものに着目するのではなく、その行為者自身が意味があると考える極めて個人的なアイデンティティに焦点をあてる。

<引用文献>

A.L.Strauss 1969 *Mirrors and Masks* The Sociology Press.

Anya P. Royce, 1982, 'Neither Christian nor Jewish' *Ethnic Identity, Strategies of Diversity*, Indiana University Press, Bloomington, pp.17-33. アニヤ P.ロイス 1996 第5章「キリスト教徒でもユダヤ教徒でもなく」p 191、『「エスニック」とは何か』青柳まちこ編 新泉社

- Barth, F. 1969. Ethnic groups and Boundaries. London: George Allen and Unwin. p14~15
- Charles Horton Cooley "Human Nature and Social Order" Charles Scribner's Sons, 1902, Transaction Publishers, 1983, pp183-185
- 陳天璽 2001 『華人ディアスポラ』 明石書店 p. 117
- De vos, George. 1975 "Ethnic Pluralism: Conflict and Accomodation". Ethnic Identity: Cultural Continuities and Change. Edited by George De Vos and L. Romanucci-Ross. Palo Alto: Mayfield Publishing. P374 アニヤ P.ロイス 1996 第5章「キリスト教徒でもユダヤ教徒でもなく」 p 213、『「エスニック」とは何か』 青柳まちこ編 新泉社
- 法務省入国管理局 2004年6月 『平成15年末現在における外国人登録者統計について』 [http://www.moj.go/PRESS/](http://www.moj.go.jp/PRESS/)
- 片桐雅隆監訳 『鏡と仮面』 2001 世界思想社
- Leo Driedger 2003 Race and Ethnicity. Oxford University Press
- 過放 1999 『在日華僑のアイデンティティの変容』 東信堂 p 12、
- 可児明弘ら編著 2002 『華僑・華人事典』 弘文堂 p 267-268
- 神戸新聞社 1987 『素顔の華僑』 人文書院 p. 111~118
- 大橋幸・菊池美代志訳 1970 『現代社会学体系4 クーリー 社会組織論—拡大する意識の研究—』 青木書店 p329-348
- 斯波義信 1995 『華僑』 岩波新書
- 朱慧玲 1996 『当代日本華僑教育』 山西教育出版社 (中国) p 151 ~
- 朱慧玲 1999 『華僑社会の変貌とその将来』 日本僑報社
- 山本須美子著 2002 『文化境界とアイデンティティ』 九州大学出版会
- Wing Chung Ng, 1999 The Chinese in Vancouver, 1945-80, Vancouver,
- Wsevolod W. Isajiw, 1974, Definitions of Ethnicity, Ethnicity, vol.1.no.2, pp.111-124 セボルド W. イサジフ 第二章「さまざまなエスニシティ定義」 青柳まちこ編 『「エスニック」とは何か』 新泉社 1996 p 77 ~

Analysis of Identity Formation among Young Overseas Chinese in Japan - Identity Formation in a Mirror -

ISHIKAWA Tomoko

This paper examines how long-time Overseas Chinese, that is, young, third-generation Overseas Chinese, form their ethnic identity in Japan. It also discusses how they define their own ethnic identity.

For the purpose of explanation, the answers to the question “To which country does your identity belong?” were specifically analyzed. The answers clearly reveal that there exist various forms of identity among long-time expatriate, young, third-generation Overseas Chinese. Reference was made to the five types of identity previously proposed by Guo Fang. Moreover, an analysis of the experiences of ethnic identity formation among these people revealed that they define their identity in terms of “subjective-objective” relations. This process resembles that of “defining the self in a mirror,” which was discussed by C.H. Cooley using the concept of the “looking-glass self.”

The paper concludes by arguing that being seen from the others (Japanese) has a strong impact for them to form their ethnic identity and to be positioned in Japan.